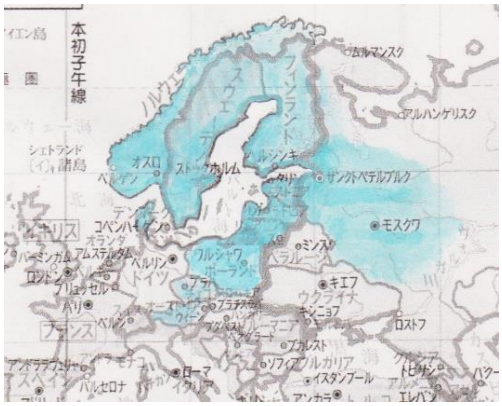
「旅鳥逍遥」

YUWV 九州支部　加 藤 征 治（文理、S41 年卒）

旅に出ると日常からかけ離れ、いろいろな風景やそこに住む人達とその文化に接し、何か新たなものが心の栄養となり長く蓄積されていく。今回の「旅鳥逍遥」は大学のワンダーフォーゲル部（WV）活動からおよそ半世紀もの年月を経たOB 老旅鳥の気ままな旅の脚跡である。本編は、世界遺産など求めて地球をぐるりと１周まわり、１.北欧・バルト三国・中欧、ロシア編、２.欧州編、３.スイス、イタリア、東欧、ギリシャ、トルコ編、４.アジア編、５．アフリカ、オセアニア編、６.アメリカ大陸編の６編に区分して掲載する。

１．北欧、バルト三国、中欧、ロシア編



「北欧」と聞くと日本からは随分遠い印象があるが、一般にはスカンジナヴィア半島のノルウェー、スウェーデンと隣のフィンランドとデンマークの４ケ国を指す。「バルト三国」は、名の如くバルト海に面する旧ソ連領のエストニア、ラトビア、リトアニアの３つの共和国である。中欧はポーランド、オーストリア、ハンガリーなどを含む。また、ロシアは訪れたところは首都モスコワともっぱら芸術の都サンクトペテルブルグの二都市のみである。

ノルウェー王国

ノルウェーの国土は南北に帯状に伸びる山脈地帯で、国名には「北への道」と言う意味があるそうである。海岸線は内陸へ最大 200km も入り組んだフィヨルド（峡湾）が特徴で、素晴らしい景観を示す。その風景が観たくて、隣のスウェーデン・ストックホルム経由で西のベルゲンへ飛んだ。現在、首都はオスロであるが、ベルゲンはかって 12-13 世紀頃はここを首都としてハンザ商人たちで栄えた港町である。港に面したカラフルな切妻屋根の木造建物の街並みの『ベルゲンのブリッゲン地区』（世界文化遺産）は独特な景観をもち、中世の時代にタイムスリップしたようで不思議な気持ちになる。

ノルウェーの西海岸の五大フィヨルドのうち西の２つ（ガイランゲルフィヨルド、ネーロイフィヨルド）はとりわけ美しく、『西ノルウェーのフィヨルド』として世界自然遺産に登録されている。その入り組んだ峡湾は、まさに“森と湖に

囲まれて、静かに眠る---”と歌にもあるように、美しい湖畔の風景を示している（図１）。ここは初めて訪れる旅鳥にとって、都会の喧騒とは全く縁のない、心安らぐまさに非日常の世界である。

このようなフィヨルドはどうしてつくられたのだろうか。今から約 100 万年前、北欧は厚い氷河で覆われていたが、気候温暖化により徐々に氷河が溶け海に流れ始めたとき大地が鋭く削り取られた。川底は氷河により押しつぶされて深くなり、そこに海水が流れ込んで複雑な海岸線がつくられたとされている。まさに自然の力でつくりだされた壮大な芸術と言えよう。

図１ 山に囲まれ眠っているように静かなフィヨルド湖畔の風景

図２ 妖精（矢印）の現れる森の瀑布

ベルゲンの町からベルゲン鉄道に乗り、さらに全長 20km フロム登山鉄道に乗り換え急勾配の絶景を楽しみ、途中停車して落差約 100m もある瀑布（ショース滝）を眺める。初夏の汗ばむ季節であったが、大滝の水しぶきを浴びてさすがに涼しい。この滝では、「心の清らかな人には妖精が現れる！」と言うガイドの説明があった。しばらくして、遠くにその姿が見えた（図２矢印）。

妖精について唐突であるが、体を流れるリンパ（液）はもともとギリシャ語「ニンフェ」（妖精、清らかな湧き出る水の意）からきたラテン語名（「リュンパ」）由来語である。欧米では「リンファ」、日本では「リンパ」と音訳されている（「リンパの科学」加藤征治、講談社 Blue Backs、10 刷、2022）

美しいフィヨルドから内陸へ入ったラールダールという町からバスで首都オスロへ向かう途中、ウエルネス・スターヴ教会に立ち寄った。この教会はディズニー映画「アナと雪の女王」のモデルとなったところで、いかにも北欧らしい支柱と梁で構成された木造の教会である（図 3）。キリスト教のこのような教会は 12 世紀前半頃バイキングが建てられたもので、最盛期には 1000 棟以上もあっ

たとされている。しかし、今残っているのは僅かで,「スターヴヒルケの女王」とたたえられている木造の聖堂『ウルネスの木造聖堂』（世界文化遺産）（図３）がある。中に入ると､壁には北欧の神話をモチーフとした繊細な木の彫刻が興味深い。

図 3 北欧のスターヴ（木造）教会

首都オスロに立ち寄った短い時間に、ノルウェーの絵画と彫刻を楽しんだ。１つは世界的な画家エドワルド・ムンクの貴重な作品「マドンナ」・「叫び」などを所蔵するムンク美術館、もう１つは彫刻家グスタフ・ヴィーゲランの多数の彫刻が並ぶフログネル公園とその傍にある彼のアーティストとしての多彩な活動をたどるヴィーゲラン美術館である。フログネル公園はヴィーゲランがデザインしたもので、彼の造った 212 点もの不思議なポーズをした作品が展示してある。それはヴィーゲランの野外美術館風で、別名ヴィーゲラン公園として親しまれている。点在する作品全体は一度では数えきれない 650 体以上もの人間が彫られているそうである。人気の像は、「シンナターゲン”（「おりんぼ」)」と呼ばれる、片足を挙げて怒っている小さな男の子の姿である（図４)。

図４ 「シンナターゲン（おこりんぼ）の像」（矢印付近に設置）（ヴイーゲラン作、フログネル公園、オスロ)、世界の動静に、筆者も少年と一緒に怒ってみた！

スウェーデン王国

スウェーデンはスカンジナヴィア半島にあるノルウェーの東側を南北に長くのびている国である。北欧４ケ国では一番大きく、国土の半分は森林でおおわれて、天然資源も豊富である。首都ストックホルムへは日本から直行便が無いので、隣の国のフィンランドのヘルシンキか、デンマークのコペンハーゲンを経由して行く。ストックホルムは大きな湖に大小 14 の島からなる「水の都」で、北欧のヴェニスとも称される美しい町である。ちなみに、ストックとは丸太を、ホルムとは橋でつながれた島と意味するという。北緯 60°に近いこの町では、

冬は雪に閉ざされ湾内も氷で埋まり、日没が早い暗い期間が長く続く。北国の春は遅く、長く閉ざされた暗い冬が明けると自然とあらゆる植物・動物、人間も一斉に春を迎え、緑に囲まれた短い夏を謳歌するという(図５)。真夏 には、綺麗な湖で育ったザリガニを湯がいて食べる「ザリガニパーテー」もある。初めて春先にスウェーデンを訪問した折、街のバス停でバスを待つ人の並びは、皆暖かい日光恋しさに、揃ってバスのくる方向とは逆の太陽の方向へ向かっていたことが印象的であった。

長年来ストツクホルムと大分との研究交流と家族親交のある友人宅には、自作の日本庭園があり、春先になるとシカやリス、野ウサギなどの小動物たちやいろいろな鳥もやってくる。もう 10 年以上も前になるが、その日本庭園に桜を植え、筆者の亡妻を偲んで“めぐみ桜”と名付けてくれた。その記念樹もここ数年コロナ禍のため渡航できず、その満開の景観を愛でる機会がないが、毎年５月中旬頃になると忘れず美しい花を咲かせているという。

図５　ストックホルムの冬と夏の風景、“めぐみ桜”（右上)、ザリガニ（右下）

ストックホルム市内に伸びる地下鉄は、湾や海峡の下に硬い岩盤をくりぬいて深く数十メートルも潜り込んでいる。各駅のプットホームの壁面はコンクリートが吹き付けられた状態で岩肌が露出しており、そこに芸術家たちのコンペ

図６　ストックホルムの地下鉄線の駅プラットホームにある壁画

により作製されたといういろいろな壁画(図６)や彫刻が飾られている。その中には数式や遺伝・医学的なものや、いろいろ独創的な絵画もあり、まるでホーム全体が美術館のようであり、地下鉄駅めぐりもけっこう面白い。

ストックホルムから北へ車で約１時間の距離にウプサラという古い歴史を持つ静かな町がある。町の中心部を川が流れ、キリスト教の拠点として 15 世紀に建てられた北欧最大を誇るウプサラ大聖堂（図７）がある。

1477 年､最初にその教会の敷地内にウプサラ大学が創設され、北欧最古の歴史を持つ。ウプサラ大学は、とくに 18 世紀植物の分類学の基礎を築いたカール・フォン・リンネの名と共に世界に知られた。また、17 世紀半にはリンパ管の体系付けをしたオラウス・ルードベックも活躍した。

図７ ウプサラ大聖堂、矢印の円塔がウプサラ大学医学部にあるグスタヴィアヌム博物館（旧人体解剖実習室）

ある日、ウプサラの街を散策していて小さな陶芸店を見つけた。その店頭の棚にいかにも北国という絵柄の陶器類があった。その中に、“化石（Fossil）”と表示された陶器を見つけた。IT 機器刻印のある陶器である（図８）。

「地球の化石」－“昔、地球と言う星があり、そこに人間がすんでいた！”そんな説明書がつきそうな逸品である。

図８ ウプサラの IT 機器と北国の刻印のある陶器

スカンジナヴィア半島の南端にある都市マルメは、スウェーデンのストックホルム、ヨーテボリに続いて第三の都市で、古くから交通や防衛の重要な拠点であり､17 世紀にスウェーデンの領土となる前はデンマークの支配下であった。コペンハーゲンとの間のエーレスンド海峡に海峡大橋が架かり､マルメから電車でたやすくコペンハーゲンまで往復することが出来で楽である。

デンマーク王国

デンマーク観光といても首都コペンハーゲンだけで、最初はノルウェーのオスロからの１日１便の夜間フェリー連絡船で、２度目はスウェーデン南端の都市マルメ（上記）から海峡大橋を電車で渡った。

コペンハーゲン（「商人の港」の意味）は 12 世紀頃北欧の玄関口として発展した都市である。近年単純に思い浮かぶのは 19 世紀デンマークを代表する童話作家アンデルセンのゆかりの地ということである。２度の訪問はいずれも１日だけだが、おもちゃみたいな街並みや歴史あるチボリ公園、そしておとぎの国デンマークを象徴する「人魚の像」などを観てまわった。よく知られる「人魚の像」は広い運河の岸辺に座しているので、イメージしていたものより意外と小さく見えるが、朝日に輝くその姿は美しい。

デンマークから成田への帰路、コペンハーゲン国際空港を発ってすぐ眼下に、洋上風力発電所がみられた（図 9）。風力発電は、風の力でタービンを回して電気に変換する発電方式で、太陽光、地熱、バイオマスなど再生可能エネルギーの開発・利用の１つである。ヨーロッパでは盛んで、その開発規模はデンマークでもイギリスに続いて大きい。近年ではスウェーデンでも大きな洋上風力発電所が建設中であると聞く。（上部点々）

図 9 コペンハーゲンの洋上風力発電

フィンランド共和国

フィンランドは南北に長い国土で、南西部は美しい海岸線、中南部から東部は湖水地、北部は厳しい気候のラップランド（ボスニア湾岸付近）である。首都ヘルシンキはバルト海に突き出た港町で、「バルト海の乙女」の愛称で親しまれている。ヘルシンキの国際空港へは日本から JAL が飛んでいて、先のストックホルムや、後で述べるロシア・サンクトペテルブルグへの乗り換えにハブ空港として便利よい。また、町の港からはストックホルムやバルト三国の１つエストニアのタリンなどへもフェリーが就航している。

フィンランドのヘルシンキ市内にある多数のルーテル派教会の中では、珍しく大地の下に造られた洞窟の教会（テンペリアウキオ教会）がある（図 10）。天然の岩をくり抜いたもので、内部の壁は自然の岩肌がそのままあり、ガラス窓

から差し込む光がその岩肌をやわらかく照らし出している。音響効果も優れているようで、フィンランド現代建築の傑作とされている。

図 10 ヘルシンキ市内にある”洞窟の教会”の入り口(左)、中には大型パイプオルガンもあり、ユニークな「ロックチャーチ」である（右）

バルト三国

バルト三国への旅は、南のポーランド経由もあるが、筆者はヘルシンキ港からフェリーでエストニア共和国の首都タリンへ渡った。一般に北ヨーロッパでは旧市街地がよく保存されていて、“中世の息づく町”として、散策は楽しい。

タリンからバスで南のラトヴィア共和国に向かう途中の町タルトウにはスウェーデンのウプサラ大学に次いで古いタルトウ大学（17 世紀創立）がある。

図 11 タルトウ大学のキャンパスの校舎風景

その大学のキャンパスの中で興味深い建物を見つけた。建物の窓には歴代の教師や現職の教師たちが共に窓から学生を眺めている写真が貼られている（図 11）。教師たちが学生の活動を暖かく見守って様子が伺える。そこには大学の教師達の教育者として矜持と学生達への深い愛と親交とが感じられる。大学人として大変印象深いキャンパス風景であった。

バルト三国の真ん中のラトビアは、16 世紀以降、ポーランド、スウェーデン、帝政ロシア、ドイツ、ソ連と被支配の歴史である（首都の『リガ歴史地区』世界文化遺産）。南のリトアニア共和国に入ってシャウレイの町はずれには、大小無数の十字架が立つ「十字架の丘」と呼ばれるところがある。この丘は墓地ではないが、筆者が訪れた冬２月には高さ５m以上の芸術的な十字架から鈴なりにか

けられたロザリオまでが雪をかぶっていた（図 12）。ここは 19 世紀前半、もともとロシアより抑圧された民族、宗教の象徴とされ十字架が建てられたそうであるが、近年は近郊・国外からも十字架を置いていく人たちが増え、「十字架の丘」は益々膨らみ続けているという。リトアニアが“十字架の国”と呼ばれることも納得する

図 12　リトアニアの「十字架の丘」（夏と冬）

リトアニアでどうしても訪ねたかったのが、カウナスの杉原記念館（旧日本領事館）（図 13）である。この記念館は、第２次世界大戦初期（1940 年頃）、ナチスの迫害を逃れてポーランドからリトアニアへ逃れてきたユダヤ人達へ日本通過ビザ（シベリア経由で米大陸へ亡命）を発行して多くの命を助けた“日本のシンドラー”杉原千畝の名を冠して保存されたものである。

図 13　リトアニア・カウナスの「杉原記念館」（左）、当時の日本領事館のオフイス机上には大勢のユダヤ人を救ったビザ書類が置いてある（右）。

ポーランド共和国

本編で記す国の脚跡は自ら訪れ国・地方であるが、ポーランドは研究交流で訪問の計画が進みながら断念せざるを得なかった脚跡のない国である。その内容・経緯は、同 WV ホームページ（2022,5）に記した（「サンショウウオと里山歩き」加藤征治）。戦争で壊滅したのちの市民の力で復活した古都『ワルシャワ歴史地区』や平和を願い誰もが知る『アウシュヴィッツとビルケナウ』（共に世界文化遺産）など訪ねてみたい処である。

オーストリア共和国

オーストリアの『ザルツブルグの歴史地区』（世界文化遺産）は、歴代大司教が富を築いたバロックの美しい都市（図 14）である。さすがはモーツアルトが活躍した町で、ザルツブルグ音楽祭は国際的に有名である。街中ではモーツアルトのデザインＭやケーキも見られた（図 15）。

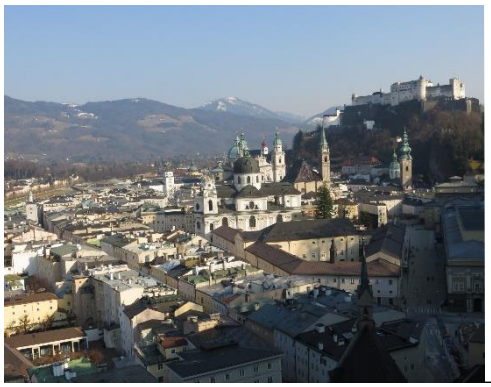


図 14　ザルツブルグのメンヒスベルの丘からの市街地を望む（左）、ザルツブルグの夕景色（右）

図 15 モーツアルト・音楽の都市、ザルツブルグの街中のデザイン

オーストリアの首都ウイーンにはハプスブルグ家の壮麗な離宮『シェーンブルン宮殿と庭園』（世界文化遺産）がある。18 世紀半、マリア・テレジア女帝が増改築したもので、宮殿の黄色い壁は「マリア・テレジア・イエロー」と呼ばれ、建物の華麗な印象を引き立てている。

ハンガリー共和国

ハンガリーの首都ブタベストは「ドナウの真珠」（『ブタベストのドナウ河岸』世界文化遺産）と呼ばれている美しい都市である。市内を流れるドナウー川を挟んで、ブタ（政治的）とペスト（商業的）の２つの地域に分かれ、両域は川に架かる大きな“くさり橋”で繋がれている（図 16）。

図 16 ブタベスト・「ドナウの真珠」“くさり橋

町には歴史ある温泉施設が点在しており、さすがは温泉大国ハンガリーである(図 17)。大きな温泉施設はまるで映像で見る古代ローマの「テルマエ・ロマエ」(ミヤザキマリ著) の世界である。さっそく水着を着て室内プール状の大温泉に入ると、多くは高齢者であるが、湯に浸かってチェスをしたり、歓談したり、読書に没頭したりしている。静かに、緩やかに時間が流れ、のんびりしたひと時である。

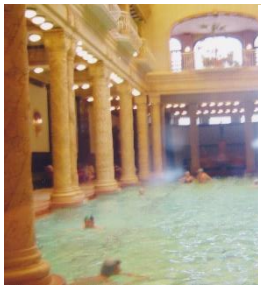


図 17 ブダペスト街中の温泉大浴場

街の高台にあるゼンメルワイス大学医学部とゼンメルワイス医学史博物館を訪ねた。ゼンメルワイスとはブダペスト生まれの医師で、19 世紀半、お産後の感染による発熱（産褥熱）の原因・予防を説き（1861 年)、妊婦の産褥熱による死亡率を激減させた。ゼンメルワイスの叫び～「手を洗いなさい！」は有名で、彼の偉大な功績を顕彰し、名を冠したゼンメルワイス（ブダペスト）大学医学部のキャンパスに彼の彫像が立っている(図 18)。

図 18 ゼンメルワイスの彫像
（ブダペスト・ゼンメルワイス大学キャンパス）

ロシア連邦共和国

近年何かと問題の多いロシアであるが、2014 年旅行会社の企画ツアーに参加して初めてロシアの首都モスクワ、西都のサンクトペテルブルグを訪れた。モスクワ観光では、広い「赤の広場」の周囲の建物の傍の比較的狭い一角に、やたらでかい奇妙なもの、「1 度も突かれず鳴らない大鐘と、1 度も打たれない大砲」とある陳列物（図 19）を見つけた。広大な大地に住み、大物好きのロシヤ人の国民性を揶揄した陳列で、さすがにロシアでも“無用の長物”とか、ロシヤを語るとき、(先年どこか WVOB 便りでも報告) いつも思い出す。思わず笑って撮った筆者の傑作である。

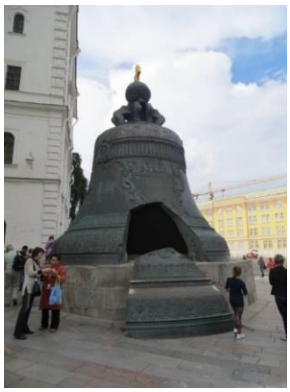


図 19 モスクワの「赤の広場」
付近に広場に放置されている
無用の長物：大鐘と大砲

また、先年(2018)は在大阪ロシア総領事館まで出向いてVISAを取得し、一人旅でサンクトペテルブルグへ出向いた。既に大学をリタイヤ―した身分ではあったが、VISA取得申請の書類で渡航目的欄に、サンクトペテルブルグ大学医学部との学術交流（解剖プラスチネーション標本）とエルミタージュ美術館での美術解剖学研究の２つを掲げた。その時の渡航ルートは、成田 /ヘルシンキ/サンクトペテルブルグ往復であった。

ロシアの西、バルト海に面する第二の都市サンクトペテルブルグ（旧首都）は、「聖ペテロの街」の意味で、市の建設者であるピョートル１世が聖人ペテロの名にちなんで付けられたものである。ロシア革命によりソビエト連邦が成立すると、ソ連建国の父ウラジミール・レーニンにちなんでレニングラードと改称されたが、1991 年のソ連崩壊により、ロシア帝国時代の旧名にもどった。

サンクトペテルブルグは市内にエカテリーナ宮殿など皇帝や貴族の豪奢な建物やロシア正教の大聖堂、救世主教会など多くある美しい町である。世界最大規模の有名な『エルミタージュ美術館』があり、建物自身が世界文化遺産となっている（図 20)。他にロシア人画家の美術品は「国立ロシア美術館」にあるが、ロシア美術はもっぱらモスコワにある「トレチャコフ美術館」が有名である。

図 20　エルミタージュ美術館の全景（左）と内庭（矢印）の木枝に石が載るアート（右）

「エルミタージュ美術館」は規模が大きくて複雑なことはよく知られており、短期間ではなかなか見られず、途中見学を断念する人も多いという。筆者も最初の訪問では、半日だけでの駆け足の観覧であったが、後年２度目には美術館の見える近くのホテルに滞在し、計画的に３日間を費やして、本館・分館・新館を回った。広い美術館では見学するのも大変で、まさに“芸術は体力だ！”という俗語を痛感した。

市内にあるサンクトペテルブルグ大学医学部（医療センター）キャンパスにはロシアの微生物・免疫学者で白血球の食菌現象（食作用）を発見したイリヤ・

メチニコフ（2008 年ノーベル生理・医学賞受賞）の銅像があり、ロシアに来たことを実感した（図 21）。

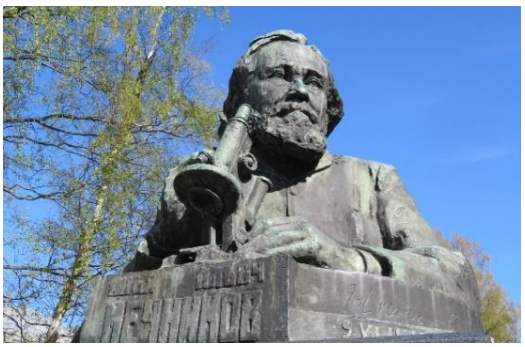


図 21　サンクトペテルブルグ大学医学部・医療センター（左）、キャンパスにあるメチニコフ博士像（右）

追記

筆者の旅鳥の形式も、ワンダーフォーゲルの山行で言えば単独行かパーティーつまり一人旅か旅友・ツアー（団体旅）である。ツアー参加は旅の道中、新たな旅友との交流もあり、それなりに楽しい。また、海外の一人旅と言っても、知人の居る国・都市が比較的多い。その場合、旅の数か月前から、手紙やメールで訪問打診しアポをとり準備する。旅立ちの前、旅人の誰もがそうであるように、観光コース・旅行計画が楽しい。ただ、研究・学術交流の仕事がらみの場合は、その成果は事前の交渉次第である。

この「旅鳥逍遥」雑録は、筆者の約 40 年の旅の脚跡を古い記憶をたどり、セピア色の古いフィルム写真やデジタル・メモリーのデータを整理しながら綴ったものである。旅した年月や諸国・地方（編）に関係なくご笑読の上、ご感想・ご意見を頂ければ幸甚に思う次第です。

2022/平成４年　水無月

コロナ禍と戦争のない、健康で平和な世界でありますように!
飛べない旅鳥の祈り

加 藤 征 治（skato224@gmail.com）